



猫の返禮

水木京太

一
西暦一千四百九十二年、クリストファー・コロンブス、アメリカを發見す。

歴史の本にかう書いてあるこほり、それまで誰一人としてアメリカなどいふ國のあることを知つたものがあつませんでした。

だからヨーロッパの船が歸つて來て、海のかなたに新大陸のあることを報告する、ヨーロッパ中の人们が、みんなびつくりして、大さ

るわけでもありません。——しかしこれまで人の行かない國だけあつて、めづらしい物事がたくさんあるので、土人から安く仕立て歸ることが出来、おかげで大もうけをしました。

それに味をしめて一航海二航海三かさねるこ身代が見る、うちに太つて、たちまち町で指折の大金持になつたのでした。

「うまいぞ、うまいぞ。」

アンサルドオはますく勢づいて、それから四度目の貿易に出かけました。ところが今度は運わるく、港を出るときから天氣模様がわるく、毎日ひどいあらしでした。船は木の葉のやうにさんさん波にもまれ、帆もかいもめちやめちやにされて、なんぎな航海をつづけましたが幾日か荒海の中をたゞよつたすゑに、やつと見知らぬ島に吹き寄せられました。——そこは、いまかはい、カナリヤの産地として有名な、カナリイ島だつたのです。

二
「へえ、大したものだね。どうだそれを拾ひに行かうぢやないか。」「うん、ぐす／＼してて、ひこに取られちゃつまらないな。」「さうとも。書は急げだ、さつそく出かけるこしよう。」「よし來た。さあ船の支度だ。」「また聞きのうはさが、それからそれと傳はるのですから、なんでもいゝこゝづくめの話になつてしまひました。そこでイギリスやスペインやオランダの港から、氣の早い連中がわれもわれもさ先をあらそつて、アメリカへアメリカへ船を乗り出すことになりました。

イタリーの貿易商人アンサルドオとても、數々の耳よりなまうけ話を聞いては、ざつこしていふんだから、おどろくね。」「このヨーロッパ全體よりも、かつて廣いつていふんだから、おどろくね。」「はは、ひろいところか。倍も三倍もある、途方もなく大きい國だ。」「それに土地がゆたかで、年中夢が實つてゐる

もはていねいに敬禮するではありませんか。

「さつきから、王様がお待ちかねです。どうか御殿の方へお出で下さい。」

さきに立つて案内するものですから、アンサルドオも半分びく／＼ものでつい行きました。森をぬけ野原を出る、なるほど向うの丘にはりつばな御殿があつて、古關口に大勢の人があ自分を出迎へに出てゐるのが見えました。近づくと、美々しい衣裳をつけた王様が、さもよろこびしさうに、アンサルドオの手をしつて、そのまま奥の廣間に導ひて行くでした。

「こんなさびしい島へよく来て下れました。わしは沖に船の姿を見て、今朝から侍ちかねてゐました。あなたは一體どちらから來られたのですか。」

アンサルドオもすつかり安心して、あらしいのために漂流したこと話を語りました。

「それはあぶないところでしたね。しかしこへ來たからは、もう心配はありません。不自由なものがあつたらなんでもあけませう。どうかゆつくりしてて、お國のイタリーの話や、そのアメリカやらの話を聞いて、聞かせて下さい。」

離島のこゝこで、船の立ち寄るこゝもないで、王様はじめ貴族の家來のものも、この珍客をようこんで歓迎して、それお茶、それお菓子、それ果物、下にもおかず親切にもてなす

アンサルドオが命から／＼上陸して、ほつと休みしながら島の様子を眺めてゐる、後の方で、へんてこなラツバの音がして、槍を持つた男が五六人ばらく駆けて来ました。

「しまつた。食人種のゐる島へ來たのかな。」

はつきして身がまへる、意外にもその男ど

のでした。

だがアンサルドオは、實はお腹がペこ／＼だつたので、早く御飯がいただきたく仕様がありません。やがておひるの時間が來て、「さあどうぞ食堂へお出で下さい。」と言はれたので、生き返った氣持で、部屋へ案内されて行きました。

どつしりした大テーブルには、一めんに美しい花がよかれで、ぶん／＼い／＼にほひをさせるし、銀の食器がびか／＼かぢやいて、これからどんなうまい御馳走が盛られるかと思はせるので、アンサルドオは喉をぐび／＼させ、つばのみこみ／＼王様ごなんんで坐りながら、いよいよ食物の出るのを待ちかまへました。

たゞアンサルドオにふしげでならないのは、五六人の貴族が手に杖を持つて、自分と王様をさりましてゐることでした。これから、せつかく大口あいて思ひ切り御馳走をたべようとするのに、そば近くで見物されるのは、じやまつ氣でもあるし、護衛にしてはあまり華々しいことはれました。第一こゝは兵隊の守つてゐる御殿の、しかも奥深い食堂の中ではありますか——アンサルドオはそのわけをたづねようしました。さ、口を開いて給仕がほや／＼の息の立つ大皿を持て、御馳走を運んで来ましたので、銀のナイフをして、も一度つばを飲み

こみました。
ちやうどそのときでした。チュー／＼、キヤ／＼、ガタ／＼ゴソ／＼……とても騒々しいもの音が、部屋の四方から起つたかと思ふと、御馳走を取りわけたテーブルの皿を目がけて、どちらともなく、たくさんの大鼠が駆けよつて来るではありませんか。

「あつ。」

アンサルドオは思はず腕で大事な御馳走をかばつて、鼠に荒されまいとしました。それと同時に、あたりに立つてた貴族たちがすばやく杖を振つて、王様の自分の皿に近寄る鼠を片づけながらぶんぐつて、追つ拂つてくれたのでやつと落ちついて、フォークを取り上げることが出来ました。——第二の皿が来たときもその通りでした。

しきり食ひをはつてから、さつきの驚きをまだ目に見せて、アンサルドオは王様にたづねました。

「王様、この島には鼠がたいへん多いやうですね。」「多いにも／＼これには命がちぢります。」王様は眉をひそめて「亂暴で、それに残える一方で。」「どうして退治ならないのです。」「退治しても追ひつくもんですか。人間は二本

の足よりないのに、奴等は四本足で走つて逃げますからな。はは。」悲しげにあきらめの苦笑が、部屋の四方から起つたかと思ふと、御馳走を取りわけたテーブルの皿を目がけて、どちらともなく駆けよつて来るではありませんか。

アンサルドオは思はず腕で大事な御馳走をかばつて、鼠に荒されまいとしました。それと同時に、あたりに立つてた貴族たちがすばやく杖を振つて、王様の自分の皿に近寄る鼠を片づけながらぶんぐつて、追つ拂つてくれたのでやつと落ちついて、フォークを取り上げることが出来ました。——第二の皿が来たときもその通りでした。

「いえ出来ますごも。さつそくやつてお目にかけませう。」

アンサルドオはすぐ船へ使ひを出して、雌雄二匹の猫を取り寄せ、王様のお目にかけました。

「これを御存じですか。」「いや知りません。鼠よりは大きいが、犬よりは小さい——何といふ獸ですか。」「これは鼠退治の勇敢な兵士です。どうかもう一度御馳走をお出し下さい。」

そこでまた御馳走が食堂へ運びこまれました。おいしそうなにほひが、ぶん／＼部屋中にほひはじめると、それをかぎつけて、鼠の群がさつきのやうに騒々しくあはれ出して来ました。そこでアンサルドオは、時分はよしこ、胸に抱いてゐた猫をはなしめたものですから——もうその後のところは、皆さんが想像されるほどの

ありさまでした。またよく間に、多くの鼠が噛み殺され、生き残った奴も、しつぽを巻いて、ほう／＼の態で退散して、網よりもうさい、あぶよりもさわがしかった鼠が、一びきも食堂にゐなくなりました。

「ほう、ほう。口を丸くして、このさまを眺めましたら、つぶしんで歎息いたしませう。これから食堂には、一びきだつて鼠が出て来ません。そして、やがてはこの島にあはれものが姿を見ゆるなくなるやうに。」「え。そんなことが出来たら、この世は天国でせうよ。」王様は信じられないらしく、重々しく首を振りました。

「え。そんなことが出来たら、この世は天国でせうよ。」王様は信じられないらしく、重々しく首を振りました。

「いえ出来ますごも。さつそくやつてお目にかけませう。」

アンサルドオは、まるで自分の手柄のやうに自慢しました。

「あゝ夢ぢやなかつた。夢ぢやなかつた。」王様はアンサルドオの肩を抱いて「あなたはわたしに三つて大恩人だ。まるで天使のやうにありがとうございました。この御恩に何を以てむかいたらいよだらう。」感謝の聲を出さないではるられませんでした。

その後、アンサルドオが一週間滞在してゐる間に、カナリイ島の鼠の數が目に見えて減つて行きました。王様はもちろん、島中のもののよろこびは、たゞへやうもありません。

いよいよ船の修繕も終つて、イタリーへ歸る



日になるごと、王様は見送りに来られて、心から別れを惜しました。

「これはわしの志だ。お禮のしるしまでに受けたまらひたい。」

家來に運ばせて來た大荷物を船に残して行きましたが、あさで開けて見るごと、どうでせう、

「どうして退治ならないのです。」「退治しても追ひつくもんですか。人間は二本

中にはたくさんの数選りの眞珠や、金鏡や貴重な寶玉類が、一ぱいはひつてゐたではありませんか。」

アンサルドオは、船がカナリイ島に漂着したばかりに、思ひがけなく莫大なお禮を贈られ、アメリカへ行つたよりも、かへつて多くの利益を得ました。そうしてもう町一番の金持になることが出来ました。

町の人たちは、みんなこの幸運をうらやみました。だが、同じ貿易商人仲間のジアコモは、アンサルドオが自分を乗り越して町一番の金持になつたのを見るごと、やしくなりません。

「カナリイ島の王様さういふのは、よつぼどのお人好しにちがひない。猫をもらつたばかりで一身代ほどのお禮をするなんて。よし、今度はおれが行つて、うんこたくさん寶物を巻き上げて来てやらう。」

そんな懲ばつた考へから、家屋敷を賣はらつて金に代へ、それでいろ／＼あづらしい品物を買ひこゝのへ、アンサルドオから聞いた航路をたどつて、カナリイ島へ出かけました。すると島のここですから、アンサルドオのさきにもおさらないやうな手厚い歓迎をしてくれました。うまいぞ、この分ならねらつたのがはづれな

いぞ。今に見ろ、アンサルドオなんかの聲をあかしてやるから。」

心の中でほくそ笑んで、王様の御殿で御馳走に舌鼓をうつてゐました。

「こんなさびしい島へよく来てくれました。王様はうれしさうに話しかけました。

「はい、實はこの間、仲間のものから、王様が慈悲深い方ださ聞きましたので、一度お目にかかりたいと思ひまして、わざ／＼やつてあるりました。」そしてジアコモは用意して來た品物をすらりとならべ立て、「これはつまらない品ですが、私が王様をおしたひ申上けるるしまでに、どうぞお納め下さいまし。」

「いや、めづらしいものをたくさんにー。」王様はこ／＼して「何もかもつかうものはかりで、どうもありがたう。お禮の申しやうもないくらいです。」心からお禮を言はれました。

それからいふもの、ジアコモの待遇は、そつとなく、いたれりつくせりのもてなしぶりでした。

「ははあ、おみやげがひどく氣に入つたんだなさあこの返禮は何だらう。猫のさきさきがつてよつぱとたくさんにちがひない。もつと大きい船を用意して來ない、積みきれないほどかも知れないと。」

そんなことを胸の中でお考へて、一週間ほど

んきにぶらく遊んでをりました。いざ歸るときになる。もちろん王様は見送りに来られました。そして大事さうに小箱を渡して、別れの言葉をのべました。

「ジャコモさん、あなたからは數々の贈物をもつて本たうにあります。こんな離れ島なので、何もお氣に入るものはないでせう。これはわしの一番大切に思つてゐるものですから、せめてこれを差し上げて御返禮にしたいと思ひます。どうかそのつもりで納めて下さい。」

ジャコモは、はじめその箱が小さいので、おや／＼これは少々勝手がちがふぞと思ひましたしかし王様が大事さうに手に持ててゐるのを見ても、よつほど珍しい品物がはひてゐるちがひない考へなほして、びよこ／＼おじぎをして受け取りました。

「王様から御返禮なんかいたぢては、まつた恐縮です。でもせつかくのお言葉ですから、ありがたく頂戴いたします。ありがとうございました。」「もうこみ上けてくるうれしさをおさへ切れませんでした。

やがて船が出るも待ちきれず、夢中になつて小箱のふたをこらあける。意外にもニヤア／＼いつて二ひきの猫が、さほけた顔を出しましたやありませんか。ジャコモはあきれかつて、氣が遠くなりさうでした。

「畜生、王様のかたりのめ。こんなさらばなんかつかませあがつて。箱を投げ捨てたジャコモは、ちだんだ踏んで氣ちがひのやうに叫び出しました。「かたりどうばう、うそつき——おれの財産を返せ。王様のどうばう……。」怒に目

(をはり)

のくらんだジャコモは、王様がほんとうに心から大事に思ふものを返禮によこしたのに對していつもでも、うらめしく口惜しく罵りつづけるのでした。

小さな動物の力

虫などのやうな小さな動物には小さな力もつてからだに不相應な、おそろしい大きな力をもつてゐるものがあります。最近の研究によりますと、ガネムシが物を引つぱる力は、そのからだを馬ほどの大きさとして計算すると、約馬二十一頭の力に相當するといひますから、おどろきます。ミツバチは、同じ割合で、馬三十頭分の力をもつてゐます。

家蠅はマツチの棒を足でつまんだりします。この力業を、人間が蟻に代つてやるとしますと、長さ八メートル半もある木を肩でかつぐ割合になります。

ノミは自分のからだの長さの二百倍も飛び上ります。ですから人間がノミのまねをするとしたら九ビルの高さを約百尺と見積つて、その約十倍も上まで、飛び上らなければならないことになります。

海のカキが、殻を開ける力も非常なもので、十五キログラムの重さでじやまをしようとしてもか

なないです。人間がカキのこれだけの力をもつてゐるとすれば、頭の上に急行用の機関車をさつと八十噸も運せることが出来る勘定です。

植物の種

ニユーヨーク植物園のグリード博士は、近來同市や市の近くにこれまでなかつた植物が七百種もふえたので、いろいろと、そのいきさつをしらべて見ました。これまでには、植物の教科書には、種子がとびひろがるのは、人間、鳥、獸、昆蟲のからだにくつついて、はこばれるのと、それから、風、川や海の流れ、汽車、汽船が、はこんでいくとかいてありました。

これまでには、植物の教科書には、種子がとびひろがるのは、人間、鳥、獸、昆蟲のからだにくつついて、はこばれるのと、それから、風、川や海の流れ、汽車、汽船が、はこんでいくとかいてありました。

しかし、同博士のしらべたところによりますと今言つた七百種の中には自動車が、車體にくつつてもつて来たのも源山があるので、博士もおどろいてゐます。

少年少女諸君も、これからは、種子の播布といふ試験問題が出たらば、この自動車をかきおとすと、満點がとれないことに、なるでせうね。